七十歳でモンテッソーリに〝出会った〟偶然とその人間的背景を語る

鼓　常良
周郷　博

☆〝日本芸術様式の研究〟出版のころ

周郷　ぼくが最初に鼓先生にお会いしたいなと思ったのは、一九三九年ごろ、文部省の学生部（思想局になった）というところにいて日本精神叢書という冊子を作るので、その編集にあたった時です。当時ですから、中にはちょっと神道とか、右翼がかったものも多かったんです。しかし先生のは全然違うんでね。私はそれをやらされて、とっても勉強になりました。そりゃもう軍国主義なんかとは関係なくて……。

そのころから、鼓先生という人と会ってみたいなと思っていました。〝日本芸術の様式〟という、日本の染物とか、盆栽とかそんなことを書かれた本がありましたね。

鼓　この本は（と書棚から横文字の厚い本を一冊おとりになって）ドイツで、ドイツ語で書いたものなんです。ですから材料なんかは大分省略してあちらへ持って行きましてやったものです。私は、在外研究員にしてもらったけれど、この仕事ばっかりしてました。

周郷　で、ドイツで、どうやって？

鼓　むこうに着いてから書き出したんです。やっぱり、むこうの実物、おもな美術館なんかを見て、それから着手しました。ですから、日本画にしろ何にしろむこうで印刷するとなると、材料が違いますからね。むこうの人も大分いろいろ研究してやったらしいです。

これも（ドイツ語で書かれた〝日本芸術様式の研究〟）大分、丸善で売ってくれたそうで、（笑い）どこかに持っている人があるかもしれません。

周郷　そりゃきっとありますね。それで、これを書かれたのは、先生、おいくつぐらいの時ですか？

鼓　そうですね……四十三歳ぐらいで

す。ベルリン大学の美学や哲学をやっていたデッソアという有名な人がいましたね。私は、この人を知っていたわけではなかったのですが、こっちにおる時に、この本の根本思想のようなことを短い論文に書きまして、その時分に美学の雑誌といったらデッソアさんの出していたものしかヨーロッパになかったので、〝そこへ出してもらえないか〟と送ったのがそもそものもとなんです。〝これなら出してあげてもいい〟といわれて、それからこれを計画して、その思想をもとに実例をそえて書いたわけです。また、言葉が果たして私の言葉でわかるかどうか、ということもありまして、むこうへ行ってから書き始めました。

そうしましたら、デッソアさんのめいか何かで女流作家を始めている人がありましてね。その人がまた偶然なことで夫と別れたんです。それで、部屋があいてるからということで、そこへ入れてもらいました。ですからその人といつも話していましたし、書いたものも見てもらってなおしてもらったりしながら、全くむこうで仕事をしたものですね。

その人、まだ生きてるんですけどね……。この前私がドイツに行った時（十一年前）には、まだ国境で銃殺されたり（まあ日本人は大丈夫だったのでしょうが）した時代でしたので、どうも勇気が出なくて、よう行かなかったです。

それで私が日本へ帰って来てから、その人の小説を、小説っていっても児童小説です。それを日本の人が訳して、岩波かなんかから出したんです。それで住所がわかりまして手紙を出しました。むこうからは、せっかくドイツへ来たのになぜ会いに来なかったのか、といって来ましたがね。

周郷　ああ、それで実際には、まだ会っていらっしゃらないんですね。

鼓　ええ。その人には娘（私が行ったころは小学校へあがる前ぐらいでした）が一人おりましたが、その子も大きくなりまして、今はテレビか何かの仕事をやってるらしいです。その子は私の名前がむずかしくて、〝ツウジ〟とか何とか私を呼んでいたものです。

それから　ベルリン大学で講演を二度させてもらいまして、この本がちょうど版にかかったところで私は帰らなきゃならなくなりました。それで校正は日本へ送ってもらったわけです。その校正が日本へ来たのが、ツェッペリン号に乗って来たんです。

周郷　ツェッペリン!!　ああ、あれはぼくがまだ十代だったかな、ツェッペリンを見てきれいだなあと思いました。

この話、夢も大きさもあって、いいですねー。

☆ 世界的な日本人

鼓　この本を作っている間っていうのは、インフルエンザにかかりまして、これはちょっとひどくて二週間ぐらい起きられないことがありました。でも疲労というものは、かえってすぐは出ないものです。二、三年ぐらいたって、日本人のためにやはりもう一つ、日本語のものを書かなければいかんということで書き直したのですが、そのあとです、疲れが出たのは……。といっても寝てしまったのではなく、何か原因なしにめまいがしてはきけがする、それが三年ぐらい続きました。そしてそれが耳に残りましてしょっちゅう耳鳴りがするようになりました。まあそれがなかなか治らんで、葬式まで治らんのかと思っていましたが、とうといいつか、すっとぬけました。

周郷　ま、時代は違いますが、岡倉天心はアメリカで本を出したり、内村鑑三なんかもドイツで出すとか、明治時代にはそういうことがありましたけれど、何か、それに近いですね。

先生はそういうことで、人間として、世界にかかわっている生き方をしておられたと思います。そこが戦後の日本人の勉強の仕方と、理論物理の人たちはまたちょっと違いますが、精神科学的なことだと、そういう世界にかかわっているスケールの大きさで物事を考えた、という人が occupied Japan 占領下では出てこないんです。

これはどうしてか、っていわれると、それは人間の運命とか、人間の感覚とかいうものがあって、それで世界と主体的にかかわっている人と、そうでなくて、外を利用ばかりしている人と二種類あるっていうことじゃないですか。

鼓　ま、そうでしょうか。しかし、時があまりよくなくて……、ナチの時代に入るその前でした。それで大分損をしました。

周郷　そうですね。先生がこの本を書かれたのが一九二九年、間もなく三三年にはナチの時代になるんですから……。

鼓　だけど、ヒットラー・ユーゲントが来ました時など、私が講演する役目に選ばれまして、奈良ホテルで講演しました。

周郷　それでも先生、ナチっていうのは全然悪い、と考えるべきではなくて、初期のヒットラーの考え方は、あとの方の激しくなったものとは違うわけですね。

鼓　暴力をあまりに利用するようになりましたからね。

周郷　そういうのが、四十代の鼓先生であって、文部省もそこを利用して書かせようとしたんだと思います。

鼓　そうですね。文部省に頼まれて、当時文化講演というのがありまして、方方の高等学校やなにかに講演に行きました。

周郷　それで、ぼくの印象では、先生のものだけは、イデオロギーとか、戦争とは何の関係もないんです。それで、そのころから先生を慕っておりました。（笑い）

結局、ドイツには何年？

鼓　二年おりました。通常そのころの在外研究は一年半ということでしたが、文部大臣が三年半はいなければ……といって辞令は三年になっていたのですが、途中で文部大臣がかわり、また一年半になりました。（笑い）しかし私は本のことがありましたので二年おったわけです。

周郷　しかし、ツェッペリンが出てきたのはよかったなあ。たしかぼくはまだ、いなかにいて……夕方、西の空に出てきたんだ。大きな姿で悠々と畠の向こうの方へ出てきたんだ。そして筑波山の上の方を飛んで行きました。

これからだって、そう爆発して落ちたりしないようにすれば、飛行船ていうのは、いいもんじゃないんでしょうかね。世の中、ただ早ければいいんじゃないんでね。

☆　モンテッソーリとの出会い

周郷　その後、四十代から七十まで、先生は第八高等学校、戦後大阪市立大学などでドイツ文学、美学を教えていらしたんだけれど……七十になってやめられてから、偶然なことみたいに、モンテッソーリとの出会いがあったということですね。

鼓　偶然、保育園をやらなきゃならなくなりましてね。ドイツの取りつけの本屋から、適当な本を送ってもらうように頼みましたら、あの「幼児の秘密」のドイツ訳が出ていて、送って来ました。戦後ヨーロッパにも幼児教育の本が何もなくて、それもまた偶然、あれだけが手に入ったんです。

その時また、「わたしのハンドブック」という本も偶然手に入りました。私が持っていたのでなく友だちが持っていまして、その友だちというのも幼児教育には全然関係のない人なのです。当時「岡田式正座法」というのがはやっていました。まだ私が大学を出てすぐぐらいのころからはやっていて、坪内逍遙先生なにかがそれに打ち込んでいました。それでその友人というのも（ドイツ文学では私より五年ぐらい先輩、小牧健夫）が岡田式正座法に打ち込んでいて、岡田さんと行動を共にしていたんです。そして岡田さんに、読んでみろとすすめられたのがこの「わたしのハンドブック」だったと

いうのです。おそらくその時分、岡田さんはアメリカにおられたので、ちょうどモンテッソーリの第一回のブームのころですから、その本を手に入れられたのでしょう。そしてその小牧さんは読みもしないで持っていたらしいのを、私がモンテッソーリを始めたということを聞いて私にくれたのです。

この二冊だけです、最初は。当時でも、いろんな本がインドに問えば手に入ったらしいのですが、それを知らんもんですから……、教具の写真を見て、手製でおもしろい教具を作って、保育園のすみに小さい小屋を建てて、そこへ子どもを四、五人呼んではそれをやらせたりしてたんです。それでやってる内に、どうもこのモンテッソーリの書いてることは、皆本当かなと思いまして、いく分疑いも出まして、どうしてもこれは実際に行って見てこなけりゃいかんということで、昭和三十八年にドイツへ行きました。

その時、今、富山大学にいられる赤羽さんに初めて会いまして、むこうを案内してもらったりしました。その時分は(七十七歳)年よりだなんていうことは、全然考えませんでしたよ。

周郷　やはり、鼓先生の、モンテッソーリに対する興味とか、幼児教育に対する興味のおこり方が、自然というか、無欲というか、やらなきゃならなくなってやったのであって、構えてやったんじゃないんですね。その純粋さは、今の日本の教育というものに対するタッチの仕方と違います。世界的視野で文学的なものも追究してこられたせいかもしれないが、細かい世間的なトリックみたいなものにかかわっているのはいやだ、というような、非常に貴重な、魅力のあるものだと思います。

☆　偶然

周郷　その保育園を始められたそもそもの事情も偶然だといわれましたね。

鼓　私の知らない青年で、同志社を出て、まだ牧師の資格もないような人が、なかなか事業家というか、資産もないのに教会と保育園を作りたいと、それも保育園は三つ目で、この近くで建てかかっていたんです。それが棟上げまで行って支払いができないために、大工が工事を中止してしまったんです。それで、私の家内がその人の教会に行っていてその人のことはちっとも悪く思っていなかものですから、説かれて、私がそこでそれじゃあ、ということになったのです。

そして初めは　お金だけ出しましょう、私は何もわからないから、といいました。ところが私が支払いが九分とおりすんだころ、その建物を抵当に入れて金

を借りていることがわかったのです。それは円満に片付いたのですが、これはやはり自分が奮発して、何もわからなくても、正直にやることだけならできるからと、始めたという偶然です。そして本のこと、ドイツで赤羽さんと出会ったこと、すべて偶然のなりゆきなのです。

それいぜんに私がやったことは皆偶然でないです。みんな一生懸命やったことばかしです。幼児教育だけは非常に偶然が働くんです。年とって始めたので、運命が同情してくれたのかどうか……。

家内がなくなった時は、やめようかと思ったんですけれど、ここで何とか仕事をしてなきゃ、今までより以上にやらにゃいかんというふうになりましてね。そして若い人の養成コースまで作ろうということになりました。それで赤羽さんに適当な人を、と頼んだら、それこそまた偶然に赤羽さんが自身できてくださることになりました。これも全く偶然ですわ。

☆ 若いころ

周郷　若い時はやはり偶然というより、一生懸命何かを求めるものだと思いますね。しかし、それだけのことをやってこないと、意義のある偶然にぶつかれないのじゃないかな。

鼓　若い時は、偶然が反対にきましたよ。大体、私がドイツ文学をやるというのは、全く強いられたのであって自分がやろうと思ったのではないんです。当時旧制高校の入学試験のやり方で〝独法〟というのにしか入れなかった。それで法律はやる気がないし、ドイツ文学しかなかったんです。それで、元来の希望は美学であったので、ああいう道をとったわけです。ですから、専門のドイツ語を使って、美術の本を書いたわけです。

周郷　しかし先生の話は、いろんなものを含んでいておもしろいですね。

鼓　小学校へ行く前後、私の母親も好きだったんですけれど、大阪の方に住んでいましたから、よく文楽、歌舞伎なんかに連れて行かれて、芝居が好きになって、遊ぶのでも芝居のまねをして遊んだりしたものです。それで、高等学校を出て大学へ入る時、まだ世間にうとく東京のことは何も知らなかったころです。新聞を見たら、坪内さんが俳優の学校をおこして、その募集をやっている、ということが出てたんです。それで、まだ大学が始まらないのにその試験を受けに東京へ行って、その時分、早稲田大学と帝国大学は格の違う時代でしたから、それだけでもすぐ私を入れてくれました。

それでずっとそれを続けて、坪内さんにもかわいがられまして、卒業して、これから帝国劇場で第一回の公演をやるこ

とになりました。私はとに角、男の方の主役に選ばれたのです。（笑い）二十四、五歳のころで、あの自殺した松井須磨子や演劇学者になった河竹繁俊の学生時代、なんかと同期でした。しかし、親が無理して大学にやってくれたことを思い、もし退学などということになったら困ると思いまして、ドイツ文科の先生に頼んで、教授会の有力な人の内意を聞いてもらいました。それは上田万年先生ですが、〝私はそんなことは考えないが漢学の頭の古い人は何というか……〟といわれましてね。〝除名になることがないとはいえない〟といわれたもんですから、断念しました。それをかまわずやっていれば、問題になったか、それが更に進んでいったか……。（笑い）しかしまだそこまで世間のこともわかっておらんし……坪内さんは〝惜しいなあ〟といってくれました。

若い時は、偶然の反対だったわけです。そして、夕食を食べてからその学校へ通いました。当時は交通機関がないですから小石川の矢来から坪内邸まで歩いて行かなければなりませんでした。いろいろな仲間がおりました。加藤精一（故人）、東儀鉄笛、土井春曙、そういうような人がいて、最近やはり芝居関係の雑誌など送ってくれました。俳優というのはもちろん、戯曲を作るというのがねらいだったわけですが、俳優というのは、いろんなことがやれますね。それが魅力だったんです。幼児教育なんて、夢にも考えておらんかったことです。やっぱり、変わったことをやりたいという性質があったんです。（笑い）

周郷　そういう、ずっと積み上げてきた大地の上に、今の鼓先生があるわけですね。

鼓　世渡りのようなことは全然考えませんでしたね。おもしろいことばかりやってきました。世渡りのことを考えたら、もっと自分の専門を作って、それでうんとのびるようにすべきです。

周郷　現在は、早く専門を作りたがって、それもそうよくも知らない専門です。そして自己主張を簡単にやっちゃいます。それと全く違う世界ですね。ぼくも世渡りはできない、そこだけが共通してるんだけれど。（笑い）

先生は、強制されてドイツ文学をやりながら、その中で美学のようなものに入られた。それは子どもの時分から求めておられたもので、美とか演劇とか、そういうものを求める、それを主題として世間的な欲が切れてきて子どもにふれた。モンテッソーリが考えている大きな宇宙論みたいなものの中のドラマとしての幼児を感じる、そういう世界に到達されたという感じがするのです。ちゃんと、つ

ながりがあるのではないかな。

鼓　モンテッソーリ自身も、偶然にそうせざるを得なかったんです。医者という専門を捨てて……ああいう広い立場に立ったからこそ、ああいうことがやれたのだと思います。

☆　モンテッソーリに見る東洋的なもの

鼓　モンテッソーリは、人間が人間になっていくこと、これは自然力によってできる、そしてそれは子どもがやっている、だから、子どもというのは一番人間を発揮した姿だといっています。本当に人間らしい生き方をするのなら、なるべく子どもにならわなければいけないということです。大人は、子どもの続きをやっているわけですから、もう少し自然に与えられたものを利用して生きて行くようにしなければならんと、モンテッソーリはいっているわけです。

しかし私は、東洋の考えもそれだと思います。東洋では〝教育〟といわないで〝修行〟といいます。自分を教育するということは人間が当然すべきことで、そしてモンテッソーリがいうように、精神と肉体は切り離すことのできないということもヨガの昔からやられているわけです。これがインド人やなにかにも感じられたのだと思います。ですから、タゴール、ガンジーというインドの代表的人物はモンテッソーリに同感しています。はっきり意識していたかどうかはわかりませんが……。

中国医学なども、道家・老子の思想から出て、根本思想はそこにあります。一般の人が自分で自分の体をみがかなければいけないという考えです。医者という特別な人を作らないで、すべての人が平常からそういうようにやっていれば、よほど困った時だけ特別な人に頼めばいいというようです。

周郷　モンテッソーリの考え方が東洋的な考え方だと先生はおっしゃいましたが、モンテッソーリ自身、そういうことをいっていますか？

鼓　いいえ、いってはいません。意識してないのです。しかし、インドや何かに同感しているというのがそうではないか、と私が外から解釈しているのです。

周郷　ムッソリーニなんていう人が出てきたせいもありますが、むしろモンテッソーリ自身が、タゴールとかガンジーにひかれるものがあってインドへ来たわけですね。

鼓　ええ。とも角、モンテッソーリはタゴールと一緒にタゴール・モンテッソーリ・スクールというのをやったくらいですから……。

周郷　そこはぼくも、モンテッソーリ

がタゴールの詩を訳したりしてますから、そうだろうと思ってました。ぼくは戦争の終りごろ、戦地へやられて、マニラで「幼児の秘密」という本を見つけて読んで、非常に印象に残っているところもあるんです。しかし、なぜこの本がカルカッタから出ているのかと不思議に思いました。

毛沢東の言葉でも、ぼくの心に残っているのは〝教育というのは、本来は自己教育だ〟という言葉です。ガンジーもその当時、精神と肉体ははなればなれになってはいけない、と作業を重んじる教育計画を発表しましたね。一九二〇年代というのは、そういうことでインドはガンジーとかタゴールの働き盛りの時代で、教育についての一つの理想ができかかった時代です。そういうことにもモンテッソーリはひかれたのじゃないかな。

鼓　ですから日本も、ただ西洋のまねをするのじゃなくて、東洋本来、日本本来の道に帰ればいいんですよ。

周郷　そこでね、やはり四十代の鼓先生のことをもう一度思い出すことになるんです。ドイツで、日本芸術というような本を、ドイツ語で出版するということ、それは、ヨーロッパのあっちこっち新しいものをひっぱってきて、新しがりをやろうなんていう、そんなんじゃないんです。東洋人の一人である鼓先生が本当の姿でヨーロッパと協力しているということです。

☆　日本独特の言語教育

鼓　近ごろ、言語教育をやらなければならないような羽目になりましてね。赤羽さんのようにヨーロッパで研修をうけてきた人たちは、日本語の言語教育ができないんです。それで私がやるより仕方がないわけで、いろいろ考えているところです。

周郷　そりゃ、むずかしいでしょうね。これは手の教育と同じに、とっても大事なんだけれども、変な言語が多すぎますね。日本語っていうのはあまり変わりすぎる、先生もそうお思いになりませんか？　ドイツ語や英語はそう変わりませんよ。

鼓　変わりすぎるというか、全然性質が違うんです。それを明治のころに西洋の言語学でなければいけないようにしてしまったんです。品詞にわけるということなんかもそうです。日本の昔の文法は、助詞とそれ以外のものというわけ方をしていたらしいです。人間の心を現わすのが助詞、具体的な外界のものを現わすのがそれ以外の言葉というふうになっているらしいんです。そういうふうに全然言葉の性質が違うんです。

第一はっきりわかることは、むこうに

ないものがありますね。敬語、男と女の言葉が違うとか、こんなことはヨーロッパ語では到底あり得ません。それから文語、口語の区別、ヨーロッパでは小学校の教科書でもゲーテの作品やなんかをとりあげることができるんです。

周郷　そうです。フランスなんかでも、高級な詩を、小学校の一年生や二年生が読んでますね。

鼓　そういうひどい違いを、ちっとも考慮しないで子どもの教育をするのは、見当違いだと思います。だからどうしても、日本独特のものがでなきゃいけないんです。

周郷　ヨーロッパの言葉は logical な組立てでできてますね。だから古典でもちゃんと今の人も読めるんです。日本のように若者が漱石を読めないなんてことがないんです。

言葉っていうのは一番人間として大事なものでしょう？

鼓　大事なものです。ことばなしには意見を交換できないだけでなく、自分がものを考えることもできなくなります。

周郷　粗雑になっちゃいます。対人関係もうまくいかなくなります。英語でいえば、identification です。自己をたしかに自己だと感じることが、言葉でないとできないんです。不安な状態になります。大人だって、本当に不安な状態の中で、ベルグソンがいったように、ある言葉を見つけると道がつくんです。

非常に重要なことなんだけれども、戦後の日本の義務教育の国語の教科書っていうのは見れば見るほどひどいものです。その上テレビの変な言葉……。

一番最初の言葉は母親の言葉です。母親の微笑とか、抱っこするとか、一緒に山道を歩いて花を見つけるとかいう人間関係です。それから肉体に言葉がついてきて、作業をして遊ぶという状態、総合された状態になるわけです。

鼓　命令法なんていうのでも、外国語は非常に簡単です。日本語はたくさんあって複雑です。

周郷　ぼくも前からそのことは考えていました。昔は〝この土手に登るべからず〟非常にはっきりしてるでしょう。〝登らないようにしましょう〟なんて何だかいやです。気のぬけたような言葉です。ヨーロッパ語の命令法っていうのは、失礼でもないし、品がいいです。空港の“Attention, please”にしても、これを日本語に変に訳せばずい分乱暴な言葉でしょ。〝耳を傾けなさい〟っていってるんですけれど、いかにも品がよくて親切です。日本じゃちょっと複雑にいうんです、だからわからなくなっちゃう。

それから方言の問題もありますね。これは論理と情緒の問題ですが……。

周郷　いろいろお話をうかがいましたけれど、鼓先生の生き方、すばらしいと思います。にごりがないんです。土台がちゃんとあって……。先生は偶然といわれたけれど、むしろそれは、出るべきものが出てきた。それを〝偶然〟とおっしゃることがつまり私欲がない、ということです。自分の欲や願いごとじゃなくて、来たものを生かす、うけ手がいいから、そこへ来たものも意味をもったいいものになるということですね。

今日は本当にありがとうございました。

（一九七四・一一・一七）

十一月十六日夕方私は久しぶりで京都を訪れました。その夜は、保育科時代からの友人、片岡たま恵さんのところに泊めていただきました。

彼女の家は、もう暗くてよくわかりませんでしたが、平安神宮、岡崎公園などのすぐ近くで環境のよいところなのだそうです。平安女学院短大保育科で教べんをとっている彼女から、明日お目にかかる鼓常良先のこと、モンテッソーリ教育のことなど、おそまきながら教えてもらいました。十一時ごろ床につくと、静かな静かな雨の音がしてきました。

十一月十七日、九時半に桂の鼓先生のお宅へうかがうお約束でしたので、起きたのは七時半ごろ、やはり雨が昨夜よりひどく降っていました。先生のお宅のあたりは月見ヶ丘という優雅な名前の住宅地、玄関まで出ていらした先生は、私の想像していた通りおやさしそうな、でも思っていたよりお背の高い紳士でした。周郷先生のいらっしゃるのをお待ちしている間に〝私の方で出した本をまだ上げていませんでしたね〟とおっしゃって、〝あなたとこども〟という、小さいけれど非常に内容の豊かな小冊子（雑誌というよりこの言葉がふさわしい）を下さいました。やがて、昨夜は禅宗のお寺にお泊りになったという周郷先生がいらして、お二人のお話が始まりました。

鼓先生は今年八十八歳、米寿を迎えられたとか、でもとてもそのお年には見えません。お話が、モンテッソーリのことになると非常に熱っぽく、録音を伺っていてもその時のふん囲気がたちまち再現されるようでした。一方ドイツ留学のころのこと、坪内逍遙先生の学校に入学され、もしかしたら俳優、鼓常良が生まれていたかもしれないなどというお話の時は、目を細めて楽しそうに話してくださいました。周郷先生も長い間の念願が叶った、とおっしゃって、ツェッペリン号のお話が出た時などまるで子どものように（失礼）喜んでいらっしゃいました。

赤間記